

歴史は未来の羅針盤

# 温故知新

これまでに刊行しました『近江日野の歴史』は、第一巻「自然・古代編」、第二巻「中世編」、第五巻「文化財編」、第六巻「民俗編」、第七巻「日野商人編」、第八巻「史料編」となりました。教育委員会や各公民館などにおいて、一冊四、〇〇〇円で好評販売中ですので、ぜひともお買い求めください。

## 湖東屋利兵衛

は醸造業であったことがわかります。一方で、三戸周辺の村人から出された借用証文が多く伝来していることから、金融業を副業としていたと考えられます。また、福地家製や正野家製の売薬も残っていることから、他の多くの日野商人と同様に、日野薬の取り次ぎをしていたことも推察されます。

村井家は、明治三十八（一九〇五）年には大湊村（青森県むつ市）へ移転し、雑貨業を営むようになり、株式会社村井商店として現在に至っています。

『近江日野の歴史』第七巻「日野商人編」を発売して以来、日野商人の活動の様子をさまざまな視点から紹介しています。日野商人の家数・出店数の多さについては本文「日野商人編」でも紹介しましたが、編集段階より、日野商人の末裔の方々より情報をいただくことが多々ありました。これらの情報はできる限り掲載するよう努めました。残念ながら編集工程の都合で本編掲載ができなかった商家もあります。そこで今回は、これまで知られておらず、また確認し得る限り本州最北端に出店を持った日野商人となる「村井作左衛門家」について紹介します。

## 最北端の日野商人

村井作左衛門家は、日野村井町出身の商家で、奥州南部三戸（青森県三戸郡三戸町）に出店を持っています。村井家に伝来する過去帳によると、初代は村井七郎右衛門といい、天正七（一五七九）年に亡くなっています。元文六

（一七四一）年には、三戸の真宗大谷派の寺院玉岑寺の旦那中が、新しく寺の定役となった僧を学ばせるために、日野の「村井宗七」という人物を頼み、国元のしかるべき寺院を紹介し、口添えをして欲しいと依頼しています。この「宗七」は当時の村井家当主で、過去帳より寛延三（一七五〇）年に亡くなっていることが確認されます。明確な開店年は判然と致しません。元文期に出店先の人々と協力し合うつながりが生まれてきたことを考えると、おそらくこの「宗七」が一七〇〇年代前半には商売を始めて、元文期には軌道に乗せたのではないかと推察されます。

また、宗七から二代を経た当主作左衛門は、文化二（一八〇五）年に奥州三戸店で亡くなっており、当主が三戸と日野を行き来していたことが判明します。



▲青森県の地図（部分）

村井家の三戸店の店名前は「湖東屋利兵衛」といいました。「利兵衛」は「理兵衛」なども記さる初期は「利八」とも称されたようです。村井家当主が世襲する名前が、「作左衛門」のほかに「利兵衛」「利平」が多かったことが店名前の由来とも考えられます。

三戸は奥州街道の宿場町で、南部藩の代官所が置かれていました。天明四（一七八四）年八月には、「湖東屋利八」宛てに三戸代官所から濁酒製造の許可が出されているので、三戸店の当時の主要業態



### 〈予約と販売のご案内〉

『近江日野の歴史』各巻の販売価格は4,000円（税込み）です。なお、「近世編」は、平成25年1月末日までに予約の申し込みをいただくと3,800円の割引価格にて販売します。

また、最終巻が無料となる全巻セット購入も受け付けています。詳しくは、後日配布しますリーフレットをご覧ください。

\*名前等読みが定かでないものはふりがなを書いていません。